詠む広場

毎日俳壇

小川　軽舟　選

手に割れば夜明けの匂ふレタスかな
大阪市　すずしろゆき

△評▽水気の多い新鮮なレタスを割る。中七が思い切りのよい表現。夜明けの高原のレタス畑の空気を吸い込むようだ。

国会中継消して黄砂の机拭く
神戸市　中林　照明

△評▽国会中継を見ていてむなしくなったのか。ざらつく机を拭く描写に心情が表れた。

戸建売るテントに机犬ふぐり
東　京　関口　昭男

鳥を見る人の背淋し鳥帰る
仙台市　伊藤　和彦

亡き父の故郷の庭春日影
奈良市　浦城　亮祐

地図になき踏み分け道や山笑ふ
安中市　大澤信太郎

声明の響く御坊や春の暮
大阪市　湯浅　喬

観梅や細き肩より京ことば
大　阪　道畑日出子

パレットに絵具たっぷり鳥曇
雲南市　熱田　俊月

春はやて押さえ遅れて帽子飛ぶ
横浜市　池末　亮輔

西村　和子　選

荒々と鋤かれし土の匂ひけり
奈良市　奥　良彦

△評▽田起こしの始めの作業。冬の間眠っていた土が目覚めて匂いたつ。潤った土は豊穣を約束してくれる。

教官のみしみし歩む大試験
川崎市　折戸　洋

△評▽「教官」といい、板張りの教室といい、追憶を詠んだものか。具体的描写が効果的。

桜咲く家族写真のまん中に
小田原市　林　梢

信楽の大壺に映え山つつじ
草津市　林　和子

春風や売り声街をひと巡り
上山市　石井　浩吉

思はざる出会ひありけり花ミモザ
豊田市　松本　文

僧院の枢落すや花月夜
東大阪市　三村まさる

桃咲くや女も交じる漁師宿
尼崎市　小石　絹子

蝶々の高くは飛ばず流さるる
みやま市　紙田　幻草

春風や人に慣れたる神の鳩
久喜市　利根川輝紀

井上　康明　選

逢ひたきと思ふ友あり桜咲く
唐津市　梶山　守

△評▽会いたいという友とは、かけがえのない時間を過ごした思い出があるのだろう。今年も桜がういういしく咲き満ちている。

太陽の光はねつけ芦の角
久喜市　利根川輝紀

△評▽アシの角は、水から顔を出すアシの芽のこと。日差しをはねつけ、するどくとがる。

海中の何に色得しさくら貝
東　京　望月　清彦

定年の挨拶続く春の風
前橋市　西村　晃

春疾風訃報はいつも出し抜けに
土浦市　今泉　準一

タンポポを踏まないやうに二塁おく
平塚市　高橋　佳代

ワイシャツの汚れ卯の花腐しかな
相模原市　はやし　央

かたかごの武蔵野の風聞いてゐる
鎌ケ谷市　佐藤　紀子

少年の膝に瘡蓋犬ふぐり
東　京　野上　卓

抽斗の中はからつぽ竜天に
藤枝市　山村　昌宏

片山由美子　選

独り居のまこと寂しき春の闇
伊万里市　田中　秋子

△評▽匂うような春の闇ではあるが、「まこと寂しき」に93歳の作者のことば以上の思いがこもる。俳句は一人一人の人生と共にある。

雨戸繰る音に散りたる庭桜
奈　良　高尾山　昭

△評▽音によって桜が散ることはないかもしれないが、わずかな気配にもという誇張表現。

建て替へし駅舎の匂ひ春の雨
日野市　田村登代子

黄雀のこぼれ落ちたる騒ぎかな
小林市　黒木　暢

しばらくは雨音心地よき朝寝
和歌山市　宮本　啓子

青空へ弾け咲きたる白木蓮
福　岡　松延　彰友

太陽に開ききつたるチューリップ
大　阪　池田　壽夫

すれ違ふ人も老人竹の秋
久喜市　梅田ひろし

君子蘭太き莟を伸ばしゆく
みやま市　紙田　幻草

ころころと病院食の桜もち
高松市　今若　あれ

うたは奏でる

花をよむ

染野太朗

春になるとSNSには、全国のさまざまな花の画像や動画が、溢れんばかりに投稿される。川沿いをどこまでも連なる満開の桜、いちめんに広がる菜の花やネモフィラ、道端のタンポポやハナニラ―。そういった色とりどりの花を眺めながら、でもこれらは自分とは別の誰かのレンズで、その誰かの眼差しをとおして届けられた花なのだよな、と思う。そして短歌もそれと同じなのだ、と思う。

・瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり　正岡子規

1901（明治34）年の作。垂れさがる藤の花房と畳のあいだのわずかな空間をじっと見ている。脊椎カリエスで床に臥す子規だからこそのアングルと発見だとも言える。一首を読んだとき、藤やその空間を直接見ているような気にもなるが、それはあくまでも、子規の眼差しや意識を追体験しているということなのだ。

・傷つくかはわたしが決める白木蓮ふくらんでゆく朝のまぎわに　早月くら

この4月に発表されたばかりの歌。誰かの攻撃的な言動に傷つくのだとしたら、それはその相手の思うつぼ。自分の心の手綱は、他の誰でもない、自分自身で握るのだ。今まさに咲きぎろうとするハクモクレンは、その力強くしなやかな宣言を支える自負や覚悟の喩だろうか。子規の藤とは異なる、抽象度の高い花だ。読者の心をも鼓舞するだろう。

自分以外の誰かの目に映る世界を知ることの豊かさ。そして同時に、自分のこの目でも直接、季節の花々をじっくり味わいたいとも思うのである。

（そめの・たろう＝歌人）